

I 研究主題

小学校においてプログラミング教育を推進・普及させる取組の在り方
～プログラミング教育のねらいに迫る実践を通して～

II 主題設定の理由

今日、自動で部屋を掃除するロボット掃除機やボタン一つで乾燥まで行う洗濯機等のように、コンピュータが内蔵された製品が人々の生活を便利で豊かにしている。また、Society 5.0 への変革期を迎え、ビッグデータの活用や AI 技術の向上によって、自動車の自動運転等の新しいテクノロジーも実用化に向けて着実に進歩を続けている。これからは少子高齢化が進み、労働人口が減少していく我が国においては、ロボットや AI 等と共存し、それらを上手く活用していく力が求められる時代が到来する。

コンピュータに自分が求める動作をさせることができ、コンピュータの仕組みの一端をうかがい知ることのできるプログラミング教育を行うことは、これからの社会を生き抜いていく子どもたちの可能性を広げることにもつながる。

そのことを踏まえ、小学校学習指導要領解説の総則編（平成 29 年 3 月告示）では、子どもたちが将来どのような職業に就くとしても時代を越えて普遍的に求められる「プログラミング的思考」を育むことが示された。小学校においては「児童がプログラミングを体験しながら、コンピュータに意図した処理を行わせるために必要な論理的思考力を身に付けるための学習活動を計画的に実施すること」とされている。また、文部科学省が平成 30 年 11 月に発行した「小学校プログラミング教育の手引（第二版）」（※以下“手引”と表記）では、小学校におけるプログラミング教育のねらいが示され、令和 2 年度からのプログラミング教育の必修化に向けて、全国的に研究・実践が始まっているところである。

本県の小学校のプログラミング教育の現状に目を向けると、本年度に県教育研修センターが実施したアンケートでは【表 1】のような結果であった。プログラミング教育や校内研修を実施している学校が少なく、県全体ではまだまだ進んでいないという実態である。

【表 1 本県においてプログラミング教育や研修を実施している小学校数の割合（令和元年8月）】

項目	実施の有無	
	実施	未実施
プログラミング教育	28%	72%
プログラミング教育の校内研修	53%	47%

所属校においても、プログラミング教育を取り入れた授業や研修、カリキュラム・マネジメント、情報機器の整備等が進んでいるとは言えない。また、年度始めに教職員に行った事前アンケートでは、「プログラミング教育の理解と実践意欲が低い」という課題が見られた。次年度からの必修化を迎えるに当たって、このような学校現場の現状を改善していく必要がある。

そこで本研究では、小学校におけるプログラミング教育のねらいに迫る実践を通して、所属校のプログラミング教育を推進・普及させたいと考えた。また、このことが本県の教育的課題の解決にもつながると考え、本主題を設定した。

III 研究目標

プログラミング教育のねらいに迫る実践を通して、小学校においてプログラミング教育を推進・普及させる取組の在り方を究明する。

IV 研究仮説

手引を基にして、授業の実施と公開を中心としたプログラミング教育のねらいに迫る実践を具現化して行えば、所属校においてプログラミング教育を推進・普及させることができるであろう。

V 研究内容

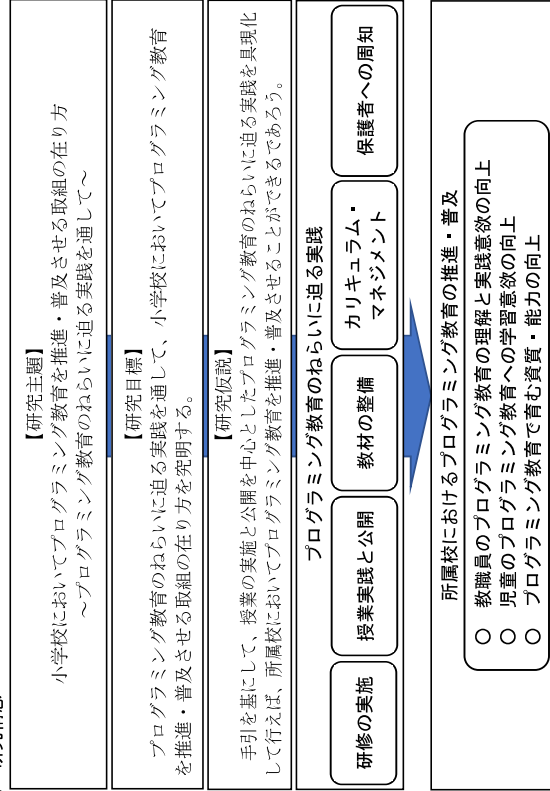
1 理論研究

- (1) 本研究の基本的な考え方
- (2) 考察について

2 実践研究

- (1) プログラミング教育の概念や指導方法についての研修の実施
- (2) 検証授業Ⅰの実施と公開
- (3) 検証授業Ⅱの実施と公開
- (4) プログラミング教材の整備
- (5) プログラミング教育を位置付けたカリキュラム・マネジメント
- (6) 保護者へのプログラミング教育の周知

VI 研究構想



VII 研究の実際

1 理論研究

- (1) 本研究の基本的な考え方
 - ア 本研究における「プログラミング教育の推進・普及」について
 - 事前アンケート（【図 2】参照）から、所属校においては、教職員のプログラミング教育の理解と実践意欲が低く、5・6 年児童のプログラミング教育への学習意欲も低いことが分かった。理由としては、教職員については、「何をどう指導すればよいか分からない」、「カリキュラム上に具体的な指示がない」、「忙しくて余裕がない」、児童については「自分にできるか不安」といった意見が多かった。
 - そこで本研究では、所属校においてこれらの要因を解消するための実践を通して、「教職員のプログラミング教育の理解と実践意欲」、「児童のプログラミング教育への学習意欲」の向上を目指し、その上でプログラミング教育で育む資質・能力を高めていくこととする。

イ 手引を基にすることについて

小学校におけるプログラミング教育は、手引によって大まかな方向性は示されている。しかし、「教科化されていないので教科書がなく、授業のイメージを具体的にともてない」「実施する教科等や実施時数が学校の裁量に委ねられている」、また、「そもそも手引の存在を知らない」といった意見があり、教職員のプログラミング教育の理解と実践意欲が低いことにつながっていると考える。したがって、手引を基にしながら、その内容をより具現化して実践していくことが重要であると考える。

また、「忙しくて余裕がない」という教職員や「自分でできるか不安」という児童もいることから、教職員にとって負担感のない実践、児童にとっても安心して取り組める授業が求められる。

ウ プログラミング教育のねらいについて

手引では、プログラミング教育のねらいが【資料1】のように示されている。

【資料1 小学校におけるプログラミング教育のねらい】

- ① 「プログラミング的思考」を育成すること 【思考力、判断力、表現力等】
- ② 身近な生活でコンピュータが活用されていることや問題の解決には必要な手順があることに気づき、コンピュータの動きをよりよい人生や社会づくりに生かそうとする態度を育成すること【知識及び技能】、【学びに向かう力、人間性等】
(①②はプログラミング教育で育む資質・能力)
- ③ 各教科等での学びをより確実なものにすること
(各教科等の内容を指導する中でプログラミング教育を実施する場合)

プログラミング教育のねらいは、大きく2つに分かれている。また、【資料1】①の「プログラミング的思考」については、手引において【資料2】のように説明されている。

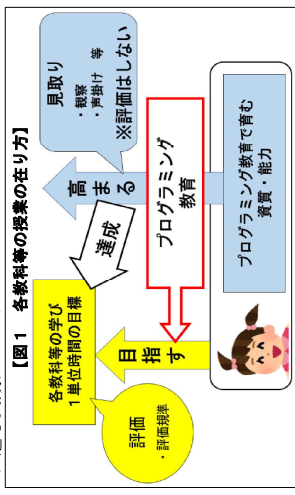
【資料2 プログラミング的思考】

自分が意図する一連の活動を実現するために、どのような動きの組合せが必要であり、一つ一つの動きに対応した記号を、どのように組み合わせたいのか、記号の組合せをどのように改善していけば、より意図した活動に近づくのか、といったことを論理的に考えていく力

エ プログラミング教育のねらいに迫る実践について

プログラミング教育のねらいに迫るためには、各教科等での授業実践が中心となる。

そこで、各教科等の授業の在り方を【図1】のように整理した。「各教科等の単元や1単位の時間の目標に応じて、授業にプログラミング教育を取り入れることで、プログラミング教育で育む資質・能力が高まり、各教科等での学びをより確実なものにする」という考えである。評価に当たっては、あくまで評価するのは、その授業における各教科等の目標が達成されたかどうかである。プログラミング教育で育む資質・能力が高まったかどうかについては、学習活動の観察や終末段階の感想等で見取っていくこととする。手引にも、プログラミング教育で育む資質・能力の評価はしないことが明記されている。



(2) 考察について

「教職員のプログラミング教育の理解と実践意欲」、「児童のプログラミング教育への学習意欲」の向上があったかについては、所属校で実施する事前アンケートと事後アンケートの結果の変容から考察する。変容を見る質問項目は【資料3】の通りとする。

【資料3 変容を見る質問項目】

- 質問① (教職員) プログラミング教育について、理解できていますか。
- 質問② (教職員) プログラミング教育を実践してみたいと思いますか。
- 質問③ (5・6年児童) プログラミング教育をしてみたいと思いますか。

2 実践研究

(1) プログラミング教育の概念や指導方法についての研修の実施

手引では、プログラミング教育の円滑な実施に向けて、次のように示されている。教師が自らプログラミングを体験することが重要で、「プログラミングは難しそうだ」という印象がもたれがちですが、～(略)～ 教師が自ら実際に体験することによって、プログラミングはそれほど難しいものではなく、むしろ面白いものだということの方が実感でき、さらに、授業でこんな使い方ができそうだとアイデアも湧いてくるものと思われまます。

また、平成30年度の神奈川県相模原市教育センターの「相模原市のプログラミング教育の取組」でも、プログラミング教育の普及に向けて、手引を基にしたスタラップが構築されている。

所属校においては、教職員の現状から、「プログラミングは意外と簡単」「プログラミング教育ってこういうことなんだ!」「これなら授業ができそう!」という思いをもってほしく考えた。したがって、手引や相模原市の先行研究にあるように、「体験を通してプログラミング教育の概念や指導方法の理解」「プログラミング教育を取り入れた授業のイメージの共有」を中心として、【表2】のように研修を行った。

実施日	取組名	主な内容
6月24日	第1回研修 (60分)	○ プログラミング教育の概要 ○ プログラミングの指導方法 (体験を通して) ・スクラッチの基本操作 ・スクラッチでの正多角形づくり (算数)
7月25日	第2回研修 (研修サポート) (120分)	○ プログラミングの指導方法 (体験を通して) ・スクラッチでの正多角形や音楽づくり (算数・音楽) ・自動ブレーキ等のロボットカーづくり (総合) ・センサーに反応して光るライトづくり (理科)
8月21日	第3回研修 (60分)	○ プログラミング教育の基本的な考え方 ・「未来の学びコンソーシアム」の動画視聴等 ○ プログラミング教育のカリキュラム案 (各教科等の年間指導計画や単元計画等)の検討

研修においては、【資料4】のように、楽しそうにプログラミングに取り組む教職員の姿が見られた。活動中の会話の中で「こんな感じで授業ができるんだ。」といった感想を述べる教職員の姿も見られた。

【資料4 研修の様子】



(2) 検証授業 I の実施と公開
ア 実施と公開

【資料5】のように検証授業 I を行い、所属校の教職員に公開した。

【資料5 検証授業Ⅰの内容】

○ 対象学年、教科、実施時期…第6学年、算数、9月

○ 単元と位置付け…第5学年で学習した「円と正多角形」の復習として時間設定


※ 第5学年で、円の中心角を等分して正多角形をかく学習をしている。今回は「3cm引く」、「120°測る」セットを6回繰り返し正六角形をかく」というように、正多角形の定義を基にしてもかかれないことを学ばせる。このかき方はプログラミング的思考を高めることにつながり、手引や学習指導要領でも例示されている。次のように2時間計画で実践した。

第1時	定義を基にして、手書きで正多角形をかく。
第2時	定義を基にして、コンピュータで正多角形をかく。

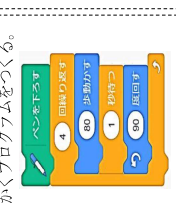
○ 本時の目標 (第2時) …定義を基にして正多角形をかくことができる。

○ 授業展開 (第2時)

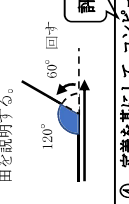
① 教師と一緒に正方形をかくプログラムをつくる。



② 正六角形をかくプログラムの確認。



③ 60°回すと正六角形になる理由を説明する。



④ 定義を基にして、コンピュータで他の正多角形をかく。



イ 考察

検証授業Ⅰにおいて、プログラミング教育のねらいに迫ることができたかどうか、「各教科等の確実な学びがあったか」、「プログラミング教育で育む資質・能力が高まったか」という2点で考察する。

(7) 各教科等の確実な学び
終末段階における、定義を基にして、コンピュータで他の正多角形をかく活動の達成状況は【資料6】の通りであった。

【資料6 コンピュータで他の正多角形をかくことができた人数(36名中)】

○ 正八角形…36名 ○ 正十二角形…36名 ○ 正三十六角形…18名

時間が足らず、正三十六角形がかけた児童は学級の半数となっていました。定義を基にして正多角形をかく」という本時の目標は全員が達成できたと捉えることができ。したがって、教科等の確実な学びがあったと考える。

(1) プログラミング教育で育む資質・能力
終末段階で書かせた感想には【資料7】のような記述が多く見られた。

【資料7 児童の感想用紙の一部】

感想
「プログラミングを学習して、とても楽しく思っています。おもしろいのは、70度角のプログラムで正多角形を作れることがとても驚きました。自分で作ることができるととてもうれしいです。また、70度角のプログラムで正多角形を作ることがとても面白いと思います。」

感想
「プログラミングを学習して、とても楽しく思っています。おもしろいのは、70度角のプログラムで正多角形を作れることがとても驚きました。自分で作ることができるととてもうれしいです。また、70度角のプログラムで正多角形を作ることがとても面白いと思います。」

【資料9 児童の感想用紙の一部】

感想
「プログラミングをして、自動車が動いたことがすごいです。70度の自動車が動いたことがすごいです。70度の自動車が動いたことがすごいです。70度の自動車が動いたことがすごいです。」

プログラミングについて、「面白い」、「またやってみたい」といった記述や発言が多くあった。第1時の手書きの体験が、「速いきれいにかける」、「辺の数が多くても簡単」というようにコンピュータを使用することのよさの実感にもつながっていた。また、「角度や回数を減らすだけ」、「繰り返せばいい」というようなプログラミング的思考の高まりが見られた児童もいた。したがって、全体的にプログラミング教育で育む資質・能力の高まりを見取ることができたと考える。

(3) 検証授業Ⅱの実施と公開
ア 実施と公開

【資料8】のように検証授業Ⅱを行い、教職員のみでなく保護者にも公開した。

○ 対象学年、教科、実施時期…第5学年、社会、10月


○ 単元と位置付け…「自動車工場のさかんな地域」の導入段階で実施

※ 「プログラミングロボットカー」に、自動ブレーキや自動追尾システムのプログラムを入力し、実際に走らせる体験をさせる。プログラミング的思考の高まりだけでなく、このような「自動車づくり」の体験から「実際の自動車はどのようにつくられているのか」という単元の学習問題にもつながると考え、設定した。


○ 本時の目標…自動車工業への学習意欲を高めることができる。

○ 授業展開


① 自動ブレーキ等のシステムを搭載した自動車のテレビコマーシャルを見る。




② プログラミングロボットカーについて知る。



③ 教師と一緒に自動ブレーキのプログラムをつくり、ロボットカーを動かす。




④ 自動ブレーキのプログラムの一部を変えて、自動追尾システムのプログラムをつくり、ロボットカーを動かす。



【資料9】「自動車づくりについて調べたい」等の思いをもち、自動車工業への学習意欲を高める。

○ 授業の様子



イ 考察

検証授業Ⅰと同様に考察する。

(7) 各教科等の確実な学び
終末段階で書かせた感想には【資料9】の下線部のように、自動車工業への学習意欲につながり、そのような記述をした児童は数名であり、また、そのような発言もほとんど聞かれなかったことから、全体的に「自動車工業への学習意欲を高める」には至らなかった。

【資料9 児童の感想用紙の一部】

感想
「プログラミングをして、自動車が動いたことがすごいです。70度の自動車が動いたことがすごいです。70度の自動車が動いたことがすごいです。70度の自動車が動いたことがすごいです。」

かったと考える。原因としては、終末段階の時間が短くなり、予定していた手立てを十分に講じることができなかつたことが考えられる。導入や展開段階の学習内容や活動を見直す必要がある。

- (1) プログラミング教育で育む資質・能力
 検証授業Ⅰと同様に、【資料9】のような「すごい」「おもしろい」「またやってみたい」といった記述が多くあった。また、学習活動の中で、「自動ブレーキのプログラムのことを繰り返せば、自動追尾システムになる」といったプログラミング的思考につながる考えを全体で共有することができた。したがって、全体的にプログラミング教育で育む資質・能力の高まりを見取ることができたと考えられる。

- (4) プログラミング教材の整備
 手引には、「今日、教育用に開発されたビジュアル型プログラミング言語などの発展・普及により、児童も含めて多くの人々が容易に体験したり活用したりすることができるようになっています」と示されている。ビジュアル型プログラミング言語とは、【資料10】のように、プログラムをテキストで記述するのではなく、視覚的なオブジェクトでプログラミングするプログラム言語のことである。本研究においては、自治体が定めるセキュリティポリシーに則って環境整備を進めることとした。その上で文部科学省・経済産業省が連携して立ち上げた「未来の学びコンソーシアム」で実践例が示されていること、さらに無料でインストールできること等考慮して、「Scratch (スクラッチ)」と「Studiino mini (スタディーミニ)」を採用した。「Scratch (スクラッチ)」は、作成したプログラムをコンピュータの画面上で実行できる。「Studiino mini (スタディーミニ)」は、「Scratch (スクラッチ)」ベースのビジュアル型プログラミング言語を使うことができ、使用できる「プログラミングロボットカー」は社会や総合的な学習の時間の活用が可能であること、付属するセンサー等の機器は理科での活用が可能であること、かつこれらの機器が安価であることも採用の理由となった。

- (5) プログラミング教育を位置付けたカリキュラム・マネジメントの手引では、プログラミング教育の重要性の重要性を次のように示している。

プログラミング教育のねらいを実現するためには、各学校において、プログラミングによってどのような力を育てたいのかを明らかにし、必要な指導内容を教科等横断的に配列して、計画的、組織的に取り組むこと、さらに、その実施状況を評価し改善を図り、育てたい力や指導内容の配列などを見直していくこと（カリキュラム・マネジメントを通じて取り組むこと）が重要である。

また、大分県では、年間を見通してプログラミング教育を取り入れた授業を実施する教科・単元が整理された年間指導計画の例、相模原市では、プログラミング教育で育む資質・能力が明記されたモデルカリキュラムが作成されている。

本研究においては、これらの先行研究を参考にしながら、次の2点に留意して、所属校におけるプログラミング教育の年間指導計画を作成することとした。

- 年間を見通して、プログラミング教育を取り入れた授業を、教科横断的に整理する。
- その授業におけるプログラミング教育で育む資質・能力等が分かるようにする。

さらに、所属校の教職員が授業をしやすいように簡単な単元計画や学習指導過程も必要であると考えた。作成に当たっては、所属校の教職員に負担を感じさせないよう、作成した案を研修の時間に検討していた出来形をとったのが、【資料11】、【資料12】の年間指導計画等である。

【資料11 年間指導計画の一部】 大王小学校 第4号

教科等	4月	5月
国語	☆印	
社会	○印	
算数		
特活		・印

○印は、【資料11】の年間指導計画に基づいて、情報モラルについて学ぶ。

【資料12 単元計画や学習指導過程の一部】

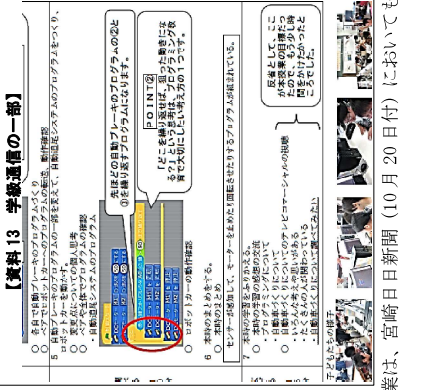
単元	単元計画	学習指導過程
1. 算数	1. 算数の意味と計算 2. 算数の応用	1. 算数の意味と計算 2. 算数の応用
2. 国語	1. 国語の基礎 2. 国語の応用	1. 国語の基礎 2. 国語の応用
3. 社会	1. 社会の基礎 2. 社会の応用	1. 社会の基礎 2. 社会の応用
4. 理科	1. 理科の基礎 2. 理科の応用	1. 理科の基礎 2. 理科の応用
5. 体育	1. 体育の基礎 2. 体育の応用	1. 体育の基礎 2. 体育の応用
6. 音楽	1. 音楽の基礎 2. 音楽の応用	1. 音楽の基礎 2. 音楽の応用
7. 美術	1. 美術の基礎 2. 美術の応用	1. 美術の基礎 2. 美術の応用
8. 情報	1. 情報の基礎 2. 情報の応用	1. 情報の基礎 2. 情報の応用

【資料11】の「☆印」は、各教科等の学びを確実にするためにプログラミング体験を行う、主に【思考力、判断力、表現力等】であるプログラミング的思考を育む授業を表す。「○印」は、プログラミング体験を行わないが、主にプログラミング教育の【知識及び技能】、【学びに向かう力、人間性等】を育むことに関係のある授業を表す。「・印」は、主に情報手段の基本的な操作技能や情報モラル等を学習する授業を表す。

- (6) 保護者へのプログラミング教育の周知

保護者への理解を図ることで、家庭においてプログラミング教育が話題に上がることが考えられる。そこでは、「こんなことを学んでいるんだね」、「プログラミング、がんばってね」といった児童への声掛けが期待できる。さらに、「プログラミング教育をしっかりと学ばせてほしい」といった声が教職員に伝わり、教職員の実践意欲の向上につながるかと考えた。

そこで、プログラミング教育を取り入れた授業について、【資料13】のように学級通信で発信したり、学校印にアップし参観日の授業として行い、実際に保護者に授業を見ていただいた。さらに、この授業は、宮崎日日新聞（10月20日付）においても紹介された。



その結果、学級通信の返信欄や参観授業の感想用紙を通して保護者から【資料14】のよ
うな感想をいただくことができましたので、教職員への回覧を行った。また、学校HPや新聞で
の紹介によって、地域への発信にもつながった。

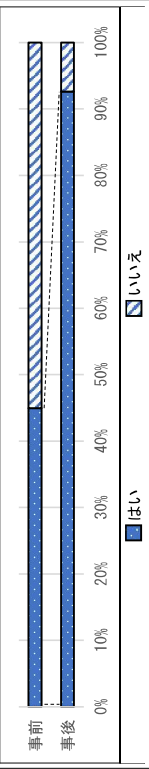
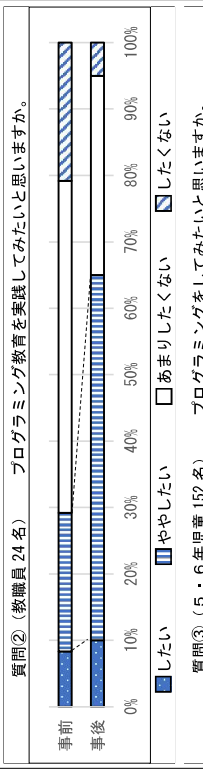
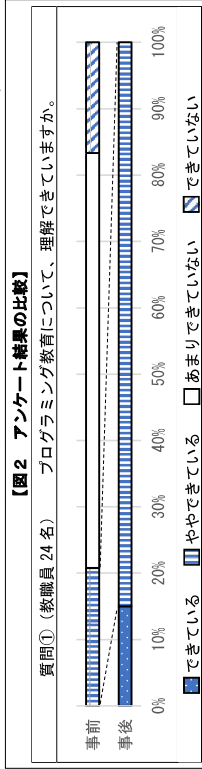
【資料14 保護者からの感想の一部】

<p>世界的に情報教育が盛んな中、本校が取り組んでいる「プログラミング」の授業は、子どもが楽しみながら学べるように工夫されていると感じました。授業中に先生が子どもたちと積極的にコミュニケーションを図られていたのが印象的でした。授業内容も、子どもたちが興味を持てるような内容で、先生も楽しそうに授業を行っていらっしゃいました。このように子どもたちが必要とするような授業を行ってほしいです。</p>	<p>授業がわかるだけでなく、子どもたちが「プログラミング」の授業は、子どもが楽しみながら学べるように工夫されていると感じました。授業中に先生が子どもたちと積極的にコミュニケーションを図られていたのが印象的でした。授業内容も、子どもたちが興味を持てるような内容で、先生も楽しそうに授業を行っていらっしゃいました。このように子どもたちが必要とするような授業を行ってほしいです。</p>
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

Ⅷ 研究の成果と今後の課題

1 アンケート結果の比較

事前と事後のアンケートの結果を比較すると【図2】のグラフのようになった。



質問①、②については、「やや理解できた」、「やや実践できた」、「やや実践したい」と回答した教職員の数が増えている。質問③については、「してみたい」と回答した児童の数が大きく増えている。

2 事後アンケートの記述

事後のアンケートには、【資料15】のような記述があった。

【資料15 事後アンケートの記述の一部】
教職員

- ・研修に参加したり、授業を見たりして、「こんな風にするといいのか」とイメージできた。
- ・児童が生き生きと取り組んでいる姿を見て、実践したいと思った。
- ・あらゆる科目、あらゆる単元で取り入れるのではなく、関わりのある一部の内容から始めてよいことが分かった。
- ・してみたいとは思いますが、自分が児童に指導できるか不安である。（※同様の記述が8名）
- ・他にもしなければならぬことが多くて、手が回らない。（※同様の記述が5名）

5・6年児童

- ・プログラミングは面白い。
- ・他にもいろいろなプログラムをしてみたい。
- ・物事を考える力が身に付いた。
- ・新しい発想がどんどん出てくると思う。

教職員のアンケートには、「プログラミング教育のイメージがつかめた」、「実践してみたい」といった感想がある一方で、「やってみて不安がある」という記述が多かった。また、「楽しくてプログラミング教育まで手が回らない」という記述もあった。児童については、「楽しかったからまたやりたい」という記述が多かった。また、「将来の役に立つ」、「考える力がつく」といった記述も見られた。

3 考察

教職員については、検証授業の実施と公開、そして研修やカリキュラム・マネジメント等に効果があったことが、アンケート結果やその記述から伺える。研修で概念や指導方法を理解し授業のイメージをもった上で、実際に検証授業を見つけた一連の流れによって、理解や実践意欲が高まったと考える。また、カリキュラム・マネジメントによって、次年度の実践を見通せたことも実践意欲への一助となったのではないかと考える。

しかしながら、「やってみて不安がある」、「忙しくて手が回らない」といった記述もあることから、実践への不安や負担感を拭き取れないという課題も見つかった。

児童については、検証授業において実際にプログラミング体験を行ったこと、その楽しさを感じることができた児童が多かったのではないかと考える。さらに、「将来の役に立つ」、「考える力がつく」といったプログラミング教育を学ぶ意義の実感にもつながっていた。児童が安心してプログラミングに取り組めるよう、「まずは教師と一緒にやってみる」といった手立てを講じたことに効果があったと考える。

4 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- 本研究における実践によって、プログラミング教育について教職員の共通理解を図り、授業のイメージをもたせることができた。特に、検証授業の公開や教科横断的な年間指導計画は、今後の実践内容の具体的な理解につながった。これらことから、教職員のプログラミング教育の実践意欲が高まった。
- 検証授業の実施によって、児童が意欲的にプログラミングに取り組み、プログラミング教育で育む資質・能力の高まりにつながった。
- 保護者を巻き込んだことにより、家庭のプログラミング教育への関心が高まった。
- 小学校におけるプログラミング教育の推進・普及につなげるために必要な取組の任りを整理することができ、次年度の必修化に備えることができた。

(2) 今後の課題

- 教職員の実践への不安を軽減するためには、実際に授業を行ってもらった方が一番であると考える。出来上がった年間指導計画等に基づいて、実践や見直しを確実に進めていく必要がある。その際、「未来の学びコンソーシアム」や「県教育研修センター」のオンライン、「教育ネット」ほかのプログラミングチャット等によって授業で活用できる教材があることを紹介することで、負担感を軽減し、気軽に授業ができるようにしたい。
- 次年度の確実な実践のために、中核となる人材の育成も必要である。
- 検証授業Ⅱの反省から、「各教科等でプログラミング教育を実施する場合は、各教科等の学びを確実なものにする」という視点で、改めて授業内容を見直す必要がある。

参考・引用文献等

- 「小学校学習指導要領 解説 総則編」 (平成29年7月 文部科学省)
- 「小学校プログラミング教育の手引(第二版)」 (平成30年11月 文部科学省)
- 「小学校プログラミング教育の理論と実践-22の実践事例-」 (令和元年6月 中央教育研究所)
- 「きのくに ICT 教育小学校プログラミング教育学習指導案集」 (平成31年3月 和歌山県教育庁)

I 研究主題

スタート・ファーストステージにおける人材育成の在り方に関する研究
～学び合いの場の調整方法と研修記録の活用を通して～

II 主題設定の理由

近年の教員の大量退職、大量採用等の影響により、教員の経験年数の均衡が顕著に崩れ始め、かつてのようには先輩教員から若手教員への知識・技能の伝承をうまく図ることのできない状況がある。このような状況下で、継続的な研修を充実させていくための環境整備を図るなど、教員の人材育成について早急な対策が必要である。

宮崎県においても、昨年度まで1年間で実施していた「初任者研修」を、今年度より名称を「初期研修」と改め、実施期間を2年間に変更した。さらに、校外研修を整理・統合し、校内での初期研修者に対する研修は「メンターチーム」を生かした組織的な研修に移行するなど、対策を講じている。

また、本県の現在の教員の年齢構成は30歳代の教員が少なく、50歳以上が県全体で約40%と多く占めている。これから50歳代が減少することにより、指導技術等が確実に後進に引き継がれるという状況が困難となり、全体的な教育力が低下し、若手及び中堅教員の学ぶ機会が減少することが懸念される。さらに、臨時的任用講師においては、講師未経験等の若年層の傾向にある。自らの所属校においても同様の傾向が見られ、職員は38名（事務室は除く）のうち新たに新規採用の職員が2名配置されている。また、臨時的任用講師が約30%の割合で働いており、そのうちの20代が占める割合は45%、講師経験1～2年の講師は、36%という構成である。

このことから、教員の年齢構成が大きく変化しつつあり、仕事内容の質・量面において、若手教員がこれからの学校の中核となることが予想される。従来、学校で意図的ではなくとも自然に行われていた、ベテラン教員から若手教員への指導のノウハウの継承が行われにくい状況となることも考えられる。さらに「分掌部長・学年主任」なども若手教員が担う機会が増えることが予想される。そのことからベテラン職員からの指導のノウハウの継承だけでなく、若手同士が学び合い解決する力をつけることもより重要となるのではないだろうかと考えた。

そこで、校内に位置づけ、スタート・ファーストステージの教員（以下「S・F教員」）の研修を、組織的、計画的に位置づけ、学び合う場、支え合う場を確立する。組織運営の観点からも、S・F教員同士が研修に取り組み、課題を解決しようとするとは、指導力の向上において有効な手立てになると考える。

また、S・F教員が指導力を向上させるためには、自己のレベル把握や、より高いレベルを目指すための客観的な指標も必要である。これからの教員生活の中で、研修の記録を行うことは、自らの課題を可視化し、振り返りができるのではないかと考え、これらができている研修記録を自己の成長のためのツールと捉える。宮崎県教育研修センターにおいては、今年度から「初期研修者のための研修資料」の中に、研修の充実を図るために、研修記録を盛り込んだ。しかしながら、評価の方法、研修の記録の活用については、まだ熟考が必要である。

以上のような取組を通して、S・F教員同士の学び合いの場の調整方法と研修記録の活用方法を明らかにすることは、S・F教員の成長や、ひいては本県の教育課題解決にもつながると考え、本主題を設定した。

III 研究目標

スタート・ファーストステージの人材育成のために、学び合いの場の調整方法と研修記録の活用方法の有効性について究明する。

IV 研究仮説

仮説1 人材育成の在り方において、学び合いの環境を整えれば、S・F教員の資質・能力が向上するであろう。

仮説2 S・F教員同士の研修において、研修記録を効果的に活用すれば、対象教員の資質・能力が向上するであろう。

V 研究内容

1 理論研究

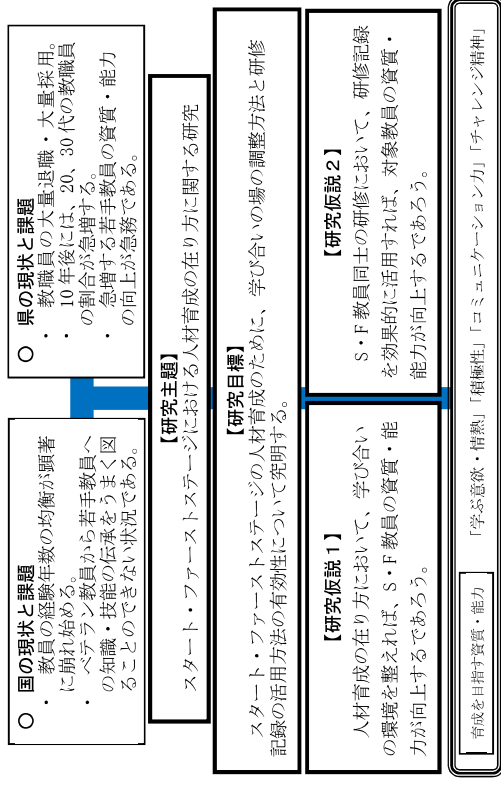
- (1) 本研究の基本的な考え方について
- (2) 学校における学び合いの場の調整について
- (3) 研修記録の効果的な活用について

2 実践研究

- (1) 学校における学び合いの場の調整について
- (2) 研修記録の効果的な活用について

3 考察

VI 研究構想



VII 研究の実施

1 理論研究

(1) 本研究の基本的な考え方について

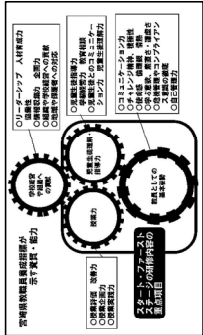
A 宮崎県教員養成指標が示す資質・能力について

宮崎県教職員キャリアデザイン手引書においては、若手教員に求められている資質・能力が【表1】のように明記されている。さらに、宮崎県教員養成指標では、【図1】のように、教員に求められる資質・能力を示している。これは、【表1】をもとに「教員としての基本姿勢」に焦点を当てられたものであると考える。
なお、本研究では、【図1】に示す「教員としての基本姿勢」の中の、特に「コミュニケーション力」「チャレンジ精神、積極性」「学ぶ意欲」について焦点化する。

【表1】ライフステージに応じて求められる資質・能力 (一般技能)

区分	ライフステージ ※(上)期は、経験年数	特に求められる資質・能力
若手教職員	■能力形成期 (1~5年)	コミュニケーション力 基礎的な授業力 素直さ・謙虚さ 学ぶ意欲
教職員	■能力成熟期 (6~10年)	積極性 危機管理やコンプラライア ンス意識の徹底

【図1】宮崎県教員養成指針が示す資質・能力



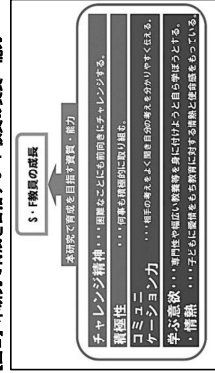
イ S・F教員の成長について

本研究では、S・F教員の成長を【図2】のように整理した。【図1】で示された資質・能力の中の「学ぶ意欲・情熱」「積極性」「コミュニケーション力」「チャレンジ精神」を高めていくことを目指していくこととする。

ウ アンケートについて

資質・能力の向上を検証するため、各研修実施後にアンケート調査を行う。なお、研修実施後、計5回S・F教員研修対象者にアンケートを行う。

【図2】本研究で育成を目指すS・F教員の資質・能力



(2) 学校における学び合いの場の調整について

ア S・F教員同士の学び合いの意義

【図3】S・F教員同士の研修実践においては、職員38名のうち、初級研修者が2名、経験の少ない臨時任用講師が6名務めている。そのため、【図3】のようにS・F教員同士の研修を行うことにした。

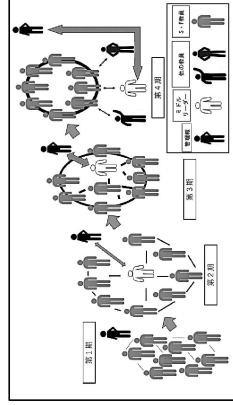
若手同士の学び合いをすることにより主体的な学校組織になることをねらいとした他県の研究においては、若手の多くが互いに学び合うことができようになつたという研究結果が出ている。このことから、管理職や先輩教員の情報や知識のみで判断するのではなく、S・F教員一人一人が自らの情報や知識を共有し、主体的に学び続けることが大切になってくるのではないかと考える。

また、切磋琢磨しながら、主体的に学び合うことは学校組織にとって重要であり、これからの学校における組織向上には、より一層必要になってくるのではないかと考える。

イ S・F教員の1年間の研修過程

7月からの研修過程について最終的なゴールを定め研修を行うこととする。【図4】は、研修の過程を4期に分けて表したものである。【表2】に示したように第2期まではミドルリーダーが中心となり、研修を行う。研修内容についてもミドルリーダーが内容を計画し、それに従って研修を行うようにする。

【図4】4期に分けたS・F教員の研修過程



【表2】S・F教員研修の関係性

第1期 (4~6月)	○一部のS・F教員同士については、研修ができていない状態である。
第2期 (7~10月)	○ミドルリーダーが中心となって、研修を行う。研修を受けることでS・F教員同士もコミュニケーション力が取れるようになる。
第3期 (10~年度末)	○ミドルリーダーがS・F教員と知り、研修の中心となる。研修の中心となる。研修の中心となる。研修の中心となる。
第4期 (1年程度)	○S・F教員同士が研修の振り返りを行い、研修の振り返りを行い、研修の振り返りを行う。

ウ S・F教員同士の研修の環境づくりについて

若手教員の研修の職場環境やポイントを述べている研究事例があり、学校組織として、S・F教員同士の研修を意図的・計画的にできる環境を作り出すこと、環境を整えることをS・F教員の成長の第一歩と考えた。

本研究においても、下記の内容をポイントと考え、S・F教員同士の研修を行うこととした。

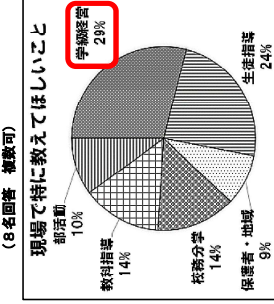
- S・F教員同士がお互いを支え合うことができるようにする。
- 自らの課題を考え、それに対し、周りの職員の助けを借りて解決していくことができるようにする。

エ S・F教員が主体性をもつための工夫

研修センターで行われたアンケート(平成30年度)結果から、S・F教員は、「授業」「学級経営」「生徒指導」について、研修のニーズや悩み等が多いことが分かった。

また、本校のS・F教員に対し職場で特に教えてほしいこととは何かと聞いたところ「学級経営」について知りたいという意見が最も多かった【図5】。このことから本研究においては「S・F教員は学級経営の研修が必要である」と捉え、S・F教員同士の研修のテーマを「学級経営」に焦点化した。

【図5】実践S・F教員研修アンケート

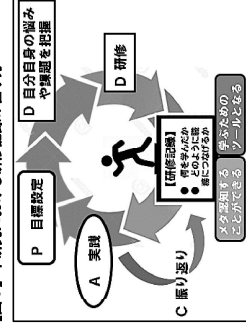


(3) 研修記録の効果的な活用について

ア 研修記録の意義

本研究では、研修記録の在り方を【図6】のように整理した。自分自身の悩みや課題を把握し、それらを解決するために研修で学び、それを実践していくことは、教員の成長にとって不可欠である。さらに、研修で学んだことをより確実にするために、実践後の振り返りも重要である。そして、振り返りを通して新たな目標を見つけることができれば、次の研修や実践につながる。そうすることで、S・F教員が、より自信をもってステップアップできると考える。このような一連のサイクルを考えたとき、研修のねらいや学んだこと、実践方法を研修者自身が明

【図6】本研究における研修記録の在り方



確に自覚することが必要である。

他県の先行研究においても、研修者自身が問題意識をもつために過去の状況を把握することが必要として、そのために研修履歴を資料として積み重ねている例もある。

そこで、本研究では、研修記録を取り入れ、記録内容は「何を学んだか」「どのような職務にこなせるか」という項目に絞り、活用することにした。そのことにより、研修記録が、学ぶため・メタ認知のためのツールとなり、次のような効果が期待できると考えた。

- 研修で学んだポイントが簡潔に捉えることができる。
- 研修で学んだことを実践したり、実践を振り返ったりする意識を高めることができる。
- 研修内容が、自己の成長にどのようなつながりがあったのかを確認することができる。

イ 研修記録の工夫

研修記録を使用する前に上記のポイントである研修で学んだことを記録する意義をS・F教員に伝える。また、研修記録を継続して簡単に使用できるように、「月日」「研修名」「研修から学んだキーワード、ポイント」「研修成果の活用」の4点に絞ることとする。

2 実践研究

(1) 学校における学び合いの場の調整について

A 研修内容の工夫

大きなテーマを「学級経営」とし、各回のテーマをS・F教員のニーズに合うように、本校の初期研修の指導担当である主幹教諭と相談の上、ミドルリーダーが決定した。主幹教諭との打合せでは見通しがもてるようにし、学校や教員の状況に照らし合わせて、内容を決めた。また、初期研修者2名にどのようなようなテーマの研修を行いたいかと聞いたところ、「実践的な研修がよい」という答えが返ってきた。研修の構成についても、一方的な講義形式での研修ではなく、話し合いの場や意見共有の場を研修の中で設ける工夫を行った【表3】。

12月の研修では、S・F教員が1月・2月の研修内容を検討する予定である。

【表3】 S・F教員研修の詳細について①

7月	研修の進め方	話し合いの場面設定	研修の進め方
<ul style="list-style-type: none"> ■ テーマ 口決め方 ■ 1学期の振り返り □ ミドル 主幹教諭 	1 学期の各個人の教育活動における成長と課題について振り返り、2学期に向けて改善策を考へる。	1 1学期の成果と課題の確認を行う。 2 課題の共有を行う。 3 課題解決のための話し合いをする。	○ 1 学期の振り返りに記載させる。 ○ グループ4人1組で改善点について話し合い、何課題を振り返りに記載させる。 ○ 2のうまいくいかなかったことについてグループで課題を1つ選ばせ、その課題解決のための方法を考え発表する。
8月	2 学期に行われる体育大会を、学級経営に生かす方法を身に付ける。	1 KJ法で課題を解決する。	○ 課題を提示する。「体育大会において、生徒が主体的に活動するには、どのような指導・支援が必要か。」 ○ 個人で考えさせる。 ○ グループでまとめさせる。 ○ グループでまとめたものをより具体的にさせる。 ○ 全体で発表するために発表を行わせる。

所属校においては、通常の学級が12クラス、知的障害特別支援学級、自閉症・情緒障害特別支援学級が各学年1クラス設けてある。時間割の都合上、8名全員がそろって研修を受講することは難しいため、ミドルリーダーと教務主任と話し合いの結果、時間割の調整、同じ内容の研修のコマ数の増加を行い、一人でも参加できるように工夫を行った。その結果、研修の平均参加人数は6.8人となった。また、参加人数によって、研修の形態を変えるこ

とにした。例えば、参加者が多ければ、全体で講義をした後、グループ協議に、少なければ初めからグループで始めるというように、運営を行う側が柔軟に対応した。

また、研修時間については、長期休業中は1コマ60分、授業がある日は、授業時間の50分に設定した【表4】。

【表4】 S・F教員研修の詳細について②

9月	研修の進め方	話し合いの場面設定	研修の進め方
<ul style="list-style-type: none"> ■ 学校行事(合唱コンクール)をどのよう学級経営に生かすか □ ミドル 主幹教諭 □ フォアーストマスターの教員 	2 学期に行われる合唱コンクールを学級経営に生かす方法を身に付ける。 PKA サイクルの意義を確認し、学級経営力の向上を図る。	1 体育大会の反省を行う。 2 2の内容を踏まえ、合唱コンクールにおける指導・支援について考える。	○ 前回の研修でまとめた「リーダー育成」「存在感」について、体育大会で良かった点や改善点を、個人で付箋紙に書く。 ○ 個人でまとめた内容をKJ法でまとめさせる。 ○ 課題を提示する。「合唱コンクールにおいて、生徒が主体的に活動するには、どのような指導・支援が必要か。」 ○ 具体的な指導・支援について、個人で考え、付箋紙に記入させる。 ○ KJ法を用いて、グループでまとめさせる。 ○ SWIHのワークシートを用いて、実践できるように個人で考えさせる。 ○ SWIHで考えた内容を共有する目的で、発表を行わせる。
10月	主幹教諭	1 生徒指導の意義を確認する。 2 最近、生徒指導上で困ったことについて、一人ずつ発表する。	○ 困ったことについて、グループ一人ずつコメントを行う。 ○ 運営者についても、自分の経験談等を話す等、発言を行う。

11月の研修では、研修計画や研修の運営の一部を、S・F教員が担うように計画を行った。7月のテーマに類似した研修を実施すること、9月に行った研修の中で用いた思考ツール「SWIH」を使用することで、負担感がないように工夫をした【表5】。

【表5】 S・F教員研修の詳細について③

11月	研修の進め方	話し合いの場面設定	研修の進め方
<ul style="list-style-type: none"> ■ テーマ 口決め方 ■ 2学期の振り返り □ ミドル 主幹教諭 	2 学期の各個人の教育活動における成長と課題について振り返り、12月以降に向けて改善策を考へる。	1 研修の流れを確認する。 2 2学期の反省を行う。 3 良かった点、改善点を共有する。 4 改善点の改善方法をSWIHのワークシートを用いて、個人で考える。 5 4で考えた内容を研修記録の「研修成果の活用」の欄に記入する。 6 5で記入した「研修成果の活用」の欄を一人ずつ発表させる。	○ 流れが分かるように簡単に行う。 ○ 2 学期における自分自身の教育活動の良かった点、改善点をワークシートに記載させる。 ○ グループ4人1組で良かった点、改善点を共有する。 ○ 3の改善点について、SWIHの観点で具体的に考えさせる。 ○ 研修記録に記入させることで、実践を意識させる。 ○ 全体で発表することにより、実践意欲を高める。

(2) 研修記録の効果的な活用について

A 研修記録を使用した研修の振り返り・まとめ

研修中に研修記録を使用することで、研修記録を記入する機会を意図的に設ける工夫を

行った。研修の導入部分で研修記録を用いて振り返りを行い、また、実践を意識するといふ意図で、研修記録を研修時の終末の部分でも活用することにした【表6】。

【表6】研修記録を使用した研修過程

導入 【10分】	展開 【30分】	その他 【5分】
<p>1 10月の研修の振り返りを行う。 (全体)【10分】</p> <p>2 研修記録の取組を振り返る。 (個人)【4分】</p> <p>3 2学期の反省を行う。 (個人)【4分】</p>	<p>4 良かった点、改善点を共有する。 (グループ)【5分】</p> <p>5 改善点の改善方法について5W1Hを用いて、個人で考える。(個人)【10分】</p> <p>6 5で考えた内容を研修記録の「研修成果の活用」の欄に記入する。(個人)【10分】</p> <p>7 6で記入した「研修成果の活用」の欄を一人ずつ発表する。(全体)【5分】</p> <p>8 まとめの発表。(全体)【5分】</p>	<p>9 アンケートの記入【5分】</p> <p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 富川が中心に行う。 ○ 研修受講者を務める。 ○ 富川はサポートを行う。 ○ アンケートを記入させる。

3 考察

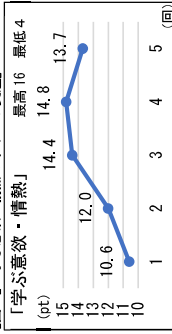
(1) 仮説1について

ア 研修アンケート結果から

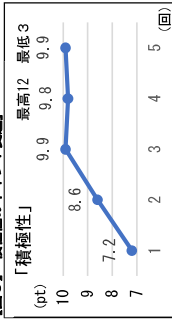
次の【図7】～【図10】は、理論研究で述べたアンケート結果であり、研究対象者の平均値を比較したものである。

研修後アンケート調査の結果について、1回目と5回目の比べると、「学ぶ意欲・情熱」は10.6ポイント(以下pt)から13.7ptに、「積極性」は7.2ptから9.9ptに、「コミュニケーション」は15.6ptから19.2ptに、「チャレンジ精神」は11.8ptから17.0ptに増加した。

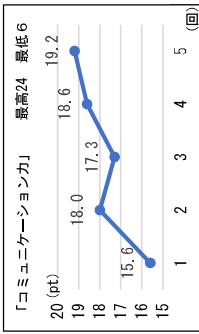
【図7】「学ぶ意欲・情熱」のポイント変遷



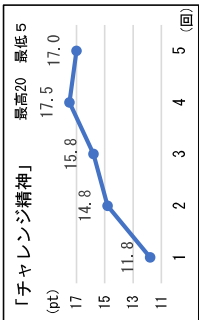
【図8】「積極性」のポイント変遷



【図9】「コミュニケーション」のポイント変遷



【図10】「チャレンジ精神」のポイント変遷



イ 研修の資料から

1回目と5回目の研修内で記述したものを比較した。研修内容は、1回目が「1学期の振り返りと2学期の改善策」、5回目が、「2学期の振り返りと12月以降の改善策」であり、類似した内容だった。それぞれの記述内容を比較してみた【表7】。

【表7】1回目と5回目の研修の資料より

問題	改善策
1 研修記録 ○ 学級経営 ○ 学級担任のフォロー ○ 副担任としてのフォロー	○ 継続した指導をしていく。
5 リーダー育成	○ 生徒が行事(職場体験)で、目的意識をもち行動できるように、担任が声かけを行う。(フローチャートで意識付け)(Aさん) ○ 生徒主体で動いてほしいので、学級専門委員会時、学級委員長が各専門委員長に評価が記載されたプリントを説明して渡すように、担任が仕込みを作る。(Bさん) ○ 朝の会や帰りの会時に、リーダーとしての自覚をもたせるために、学級委員長の生徒が、クラス全体に対してその月の活動の内容について発信するように、担任が声かけを行う。(Cさん)

ウ 考察

研修後アンケートの1回目と5回目を比べると、「学ぶ意欲・情熱」のポイントが増加した。さらにS・F教員の記述した改善策に注目してみると、5回目の研修では具体的で実践的な内容となった。これは研修のテーマが「学級経営」であり、それぞれの研修内容が、S・F教員のニーズに合っていたと考えられ、意欲的に研修に取り組んだことが推察できる。これらのことから、「学ぶ意欲・情熱」の意識が開始当初と比べると向上したと考える。同じく「コミュニケーション」のポイントも増加した。一月に1回、本研修を行い、意図的に同じ課題に向き合い解決する場を設けたことにより、本研究の環境づくりの要点である「お互いを支え合うことができるよう」になることにつながったと推察できる。これらのことから、「コミュニケーション」の意識が向上したと考える。

以上のことから、S・F教員同士の学び合いの環境を整えることは、S・F教員の成長に有効であると言える。

(2) 仮説2について

ア 事前・事後アンケート結果から

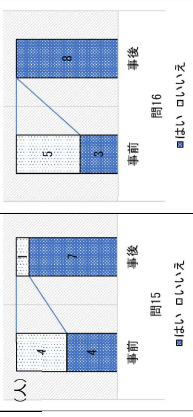
S・F教員研修を実施するにあたり、研修開始前と5回目終了後にアンケートを実施した。アンケートの一部項目と結果を【表8】、【図11】に示す。

問15の質問に対し、「はい」と答えた研修者が4名から7名と増えた。また、問16の質問に対し、「はい」と答えた研修者が3名から8名に増えた。

【表8】事前・事後アンケート一部項目

質問	事前	事後
問15 校内の研修を受けた時に、その内容を記録し、職務中に振り返るなど、参考にしていますか。	4	7
問16 校外の研修を受けた時に、その内容を記録し、職務中に振り返るなど、参考にしていますか。	3	8

【図11】事前・事後アンケート一部項目結果



イ 研修成果の活用

「研修成果の活用の有無」について、質問紙調査を各研修後に行った。その結果を【表9】、【表10】に示す。研修内容を「活用した」と答えた研修者が、回を追うごとに増加した。また、「活用した場面・感想」に着目し、1回目と4回目を比べると、4回目の内容がより具体的な場면을記述するようになった。

【表9】研修内容の活用の有無

研修内容	活用した	活用しなかった	参加者人数	人数	%
1回目	活用した	活用しなかった	7	5	63
2回目	活用した	活用しなかった	5	2	29
3回目	活用した	活用しなかった	6	3	60
4回目	活用した	活用しなかった	8	2	40
	活用した	活用しなかった		6	100
	活用した	活用しなかった		0	0
	活用した	活用しなかった		8	100
	活用した	活用しなかった		0	0

【表10】活用した場面・感想など活用しなかった理由

活用した場面・感想	活用しなかった理由
1 活用した場面・感想	<ul style="list-style-type: none"> ● 研修中のコミュニケーションで、行動があったこともあり、より具体的に内容を共有することができた。 ● 特に活動中のコミュニケーションを振り返ることができた。 ● 研修後の振り返りや振り返りシートで、研修内容を振り返ることができた。 ● 研修後の振り返りや振り返りシートで、研修内容を振り返ることができた。 ● 研修後の振り返りや振り返りシートで、研修内容を振り返ることができた。
2 活用した場面・感想	<ul style="list-style-type: none"> ● リーダーへの声かけを意識し、研修中に声かけができた。 ● リーダーへの声かけを意識し、研修中に声かけができた。 ● リーダーへの声かけを意識し、研修中に声かけができた。 ● リーダーへの声かけを意識し、研修中に声かけができた。 ● リーダーへの声かけを意識し、研修中に声かけができた。
3 活用した場面・感想	<ul style="list-style-type: none"> ● ハートリーダーが悩んでいるときにアドバイスをした。(自分自身が悩んでいることをなかなか聞いてくれない) ● ハートリーダーが悩んでいるときにアドバイスをした。(自分自身が悩んでいることをなかなか聞いてくれない) ● ハートリーダーが悩んでいるときにアドバイスをした。(自分自身が悩んでいることをなかなか聞いてくれない) ● ハートリーダーが悩んでいるときにアドバイスをした。(自分自身が悩んでいることをなかなか聞いてくれない) ● ハートリーダーが悩んでいるときにアドバイスをした。(自分自身が悩んでいることをなかなか聞いてくれない)
4 活用した場面・感想	<ul style="list-style-type: none"> ● 研修中のコミュニケーションで、行動があったこともあり、より具体的に内容を共有することができた。 ● 研修中のコミュニケーションで、行動があったこともあり、より具体的に内容を共有することができた。 ● 研修中のコミュニケーションで、行動があったこともあり、より具体的に内容を共有することができた。 ● 研修中のコミュニケーションで、行動があったこともあり、より具体的に内容を共有することができた。 ● 研修中のコミュニケーションで、行動があったこともあり、より具体的に内容を共有することができた。

ウ 考察

事前・事後アンケート結果から、S・F教員は校外で研修した内容を、研修記録を用いて振り返ることがわかる。また、研修内容の活用が回を追うごとに増加していること、さらに「活用した場面・感想など」の記述内容がより具体的な場面に想起させる内容になっていることが分かる。これらは、研修のポイントやキーワードを研修記録に記入したことにより、S・F教員が研修で学んだことを実践に生かしたと推察できる。また、研修記録の「研修成果の活用」欄に記入したことを目標にしてS・F教員が意識的に実践につなげることができると考えられる。このことから、「学んだこと」や「どのよう実践につなげるか」を記入した研修記録を研修内で活用することは、S・F教員の学ぶ意欲につながると考えられる。

以上のことから、研修記録を効果的に活用することは、S・F教員の「学ぶ意欲・情熱」の成長に有効であると考えられる。

Ⅷ 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- 研修後アンケートから「学ぶ意欲・情熱」「コミュニケーション力」の変容が見られた。そのため、学級経営を研修テーマに設定し、S・F教員同士の学び合いの場を調整したことは、「学ぶ意欲・情熱」「コミュニケーション力」という点において、S・F教員の成長に有効であると言える。
- 研修受講後、研修記録に記入し職務中に振り返る研修者が増加した。また、研修成果の活用を行っている研修者も増加した。そのため、研修で学んだことを研修記録に記入し研修内で振り返ったり、改善策を記入し実践につなげたりするなど、研修記録を効果的に活用することは、「学ぶ意欲・情熱」という点において、S・F教員の成長に有効であると言える。

2 今後の課題

- 計5回の研修の計画や運営の中心はミドルリーダーによるものであった。S・F教員研修の最終的なゴールは、S・F教員が中心となるため、移行する方法や時期など、熟考する必要がある。
- 研修者によって、研修から学んだキーワードやポイントを記入する意義や研修記録の記入方法の理解に差があり、記入する意識や内容にもその差が出てきた。そのため、研修の中で記録を用いて研修を実施したり、研修時間内に記録の記入時間を確保したりするなど、運営者側の活用方法について検討する必要がある。

参考文献・引用文献

- 「中学校学習指導要領 解説 総則編」(2017年3月 文部科学省)
- 「なぜトヨタは人を育てるのがうまいのか」(2006年1月 若松義人 PHP 研究所)
- 「人材育成のための基礎知識」(2000年6月 上杉滋)
- 「人材育成ハンドブック いま知っておくべき100のテーマ」(2017年10月 トーマツインノベーション株式会社 ダイアモンド社)
- 「今こそ人を育てる」(2001年1月 城山三郎 光文社)
- 「授業研究を育てる」として若手教員の学び合いガイドブック」(2011 神奈川県)
- 「高知県公立小学校及び中学校並びに県立学校若年教員研修の概要」(2019 高知県)
- 「教師の資質・指導力の向上のための人材育成の在り方検討会報告書」(2013 高知県)
- 「研究紀要」(2018 福島県特別支援教育センター)
- 「若手教員の学級マネジメント力が伸びる！」(2018年6月 田中博之 金子書房)